改訂版日常的解離尺度の作成 2

再検査信頼性、基準関連妥当性の検討

○舛田亮太

(久留米大学医学部神経精神医学講座)

キーワード: 改訂版日常的解離尺度、再検査信頼性、基準関連妥当性

Validation of revised normal dissociation scale

Ryota MASUDA

(Department of Neuropsychiatry Kurume University School of Medicine)

Key words: revised normal dissociation scale, test-retest reliability, criterion-related validity

目 的

解離は、DSM-IV-TR (APA, 2000) では「解離性障害」として病的体験がまとめられている。一方で、一時的な空想、没頭、離人感、自動行動等、日常生活を円滑に送るための非病理的～軽度の解離体験も存在する。舛田(2008)は、青年期に比較的高頻度に生じる、非病理的から軽度の解離を「日常的解離」と命名し、「意識・記憶・同一性等の遮断・喪失が一時的・限定的で、本人にその自覚があり、ある程度統制性のある解離機制/体験」と定義した。舛田(2008)の日常的解離尺度は、4 因子構造 22 項目となったが、尺度項目の内容範囲は不十分で、十分な妥当性を示すには更なる尺度精緻化の必要性が示された。そのため、舛田(2011)では 49 項目 5 因子構造からなる改訂版日常的解離尺度が作成された。本稿では舛田(2011)に続き、改訂版日常的解離尺度の因子構造の確認、再検査信頼性、基準関連妥当性の検討を行う。

研 究 1

方 法

調査協力者: 大学生、大学院生、高専生計 564 名

(男性 128 名、女性 436 名、平均 19.95 歳、SD1.196)

調査時期: 2008 年~2010 年

使用尺度: 改訂版日常的解離尺度(舛田, 2011) 49 項目 5 件法

結 果

改訂版日常的解離尺度の因子構造: 改訂版日常的解離尺度の因子構造を確認するために、Amos を用いた。日常的解離からの 5 因子の標準化係数は、F1「没入・没頭」、F2「健忘による情動対処」、F3「非現実感」、F4「うわの空」、F5「疎隔感」の順に、.437, .269, .818, .397, .633 となった (Figure1 参照)。

$\chi^2=24.711, df=5, p<.001$ RMSEA=.084 CFI=.936

Figure1 改訂版日常的解離尺度の因子構造

研 究 2

方 法

調査協力者、調査時期: 研究 1 と同じ。

手続き: 以下で構成される質問紙を一斉配布・回収

① 改訂版日常的解離尺度(舛田, 2011) 49 項目 5 件法

② 解離性体験尺度 (DES; 田辺, 1994) 28 項目 11 件法
なお再検査信頼性を確認するための倫理的配慮として、アルファベットと数字からなる 4 桁の任意のパスワードを回答者に設定させた。そして初回調査後の 1 か月後に①を実施した。

結 果

再検査信頼性の検討: 2 回の調査に回答し、パスワードが一致したのは 564 名中、386 名 (男性 76 名、女性 310 名、平均 19.89 歳、SD1.206) であった。改訂版日常的解離尺度 5 因子 F1「没入・没頭」、F2「健忘による情動対処」、F3「非現実感」、F4「うわの空」、F5「疎隔感」について、1 回目、2 回目の因子得点間で相関分析を行った。相関係数は順に、 $r=.830, .769, .697, .763, .687$ となり、正の有意な相関がみられた (Table 1 参照)。

Table1 改訂版日常的解離尺度の再検査信頼性 ** $p<.001$

再検査との相関 (N=386)	
F1「没入・没頭」	.830**
F2「健忘による情動対処」	.769**
F3「非現実感」	.697**
F4「うわの空」	.763**
F5「疎隔感」	.687**

基準関連妥当性の検討: 改訂版日常的解離尺度と DES を共に回答したのは、564 名中、467 名 (男性 100 名、女性名、平均 19.91 歳、SD1.213) であった。両尺度得点間で、相関分析を行った。相関係数は順に、 $r=.475, .152, .498, .509, .415$ となり、正の有意な相関がみられた (Table2 参照)。

Table2 改訂版日常的解離尺度と DES の相関係数 ** $p<.001$

DES (N=467)	
F1「没入・没頭」	.475**
F2「健忘による情動対処」	.152**
F3「非現実感」	.498**
F4「うわの空」	.509**
F5「疎隔感」	.415**

総 合 考 察

研究 1 では、改訂版日常的解離尺度は因子構造の中でも、非現実感、疎隔感と大きく関連していることが示された。また研究 2 では、5 因子全てが再検査、DES とともに正の有意な相関を示し、舛田(2008)の課題とされた再検査信頼性、基準関連妥当性がある程度確認された。今後、本尺度が不安や抑うつ等の精神的健康指標に与える影響や、臨床場面でも利用可能な短縮版の作成を検討していくが必要である。

引 用 文 献

舛田亮太 2008 青年期における日常的解離に関する調査研究 心理臨床学研究, 26(1), pp84-96. 舛田亮太 2011 改訂版日常的解離尺度の作成 日本心理学会第 75 回大会論文集 p450.